

レトリック偶感



野内良三

ヨーロッパ文化を本当に理解するためにはギリシア・ラテン（古典）とキリスト教を知る必要があるとはよく言われることだ。なるほど、それを裏づけるかのようにこの二つについてはこれまで懇切丁寧に紹介されてきた。もちろん、こうした動きに異を唱えるつもりは毛頭ない。ただ、なにか一つ忘れてはいませんかと言いたい。レトリックだ。私にいわせれば（大胆に単純化すると）ヨーロッパ文化の基底には「対決」のスタンスがある。その「対決」は神対人間（宗教＝契約）、人間対自然（科学＝合理主義）、人間対人間（個人主義）という形で現象する。この緊張したスタンスこそがヨーロッパ文化を導いてきたのだ。三番目の「対決」に深く関わるレトリックについては、残念ながら応分の応接がなされてきたとは言いかねる。

レトリックは約めて言えば、口頭であれ文章であれ言葉を駆使し、人間の理性（左脳）と感情（右脳）に働きかけて、相手を説得する（相手から同意を得る）技術のことである。レトリックの起源が、前五世紀頃ギリシア植民地で頻発した土地所有権をめぐる訴訟にあったということは、注意していいだろう。当時は法律の専門家は存在せず、人々は自分の権利は自分で守るしかなかった。とうぜん口のうまい人間が得をした。それでレトリックの登場という次第である。

どういうわけか、レトリックには昔も今もとかく芳しくない風評がついてまわる。「白を黒と言いくるめる」三百代言だとか、内容空疎な美辞麗句だとか、それはもうさんざんだ。ただ、なんだかんだといわれながらも、不思議なことにギリシア以来二千年以上の長寿を保つてきたのだ。これにはそれなりの理由があるはずだ。日本人にはあまりピンとこないかもしれな

いが、レトリックはヨーロッパ人にとって生きてゆく上で大切な技術なのだ。海に囲まれ、比較的同質的な人間の集まりである日本と違って、ヨーロッパは民族や言語や文化を異にする多くの国々が狭い地域に雑居している。他人はなにを考えているのか分からない、自分と違った考え方をしているのかもしれない。他人は「異人」である。だから、自分の考え方を相手にきちんと説明して相手から理解してもらう必要がある。レトリック（説得術）が^{もと}求められるゆえんである。

明治くらい日本は欧米からさまざまな文物を貪欲に取り入れ、おのれの滋養としてきた。だが、「和をもって貴しとなす」——「個」よりも「集団」の論理を優先する日本的風土ではどうやら説得術の出る幕はなかった、自由民権運動と雄弁術が結びついた短い「政治の季節」をのぞけば。

ところが、である。日本人も最近ようやく「説得」の必要性を感じ始めたらしい。昨今、日本を取り巻く状況は大きく変わりつつある。私たちの身の回りを見渡しても国際情勢に目を転じて「国際化」「個性化」の波はひたひたと押し寄せている。国家から個人のレベルまで誰もが自己を主張する（必要を感じている）。従来のメディアにインターネットも加わり、今では誰もが自由に（手軽に）自己表現ができる。会ったこともない人たちとも情報を交換する。相手に対して自己の立場をはっきりと主張することが求められる。「説得すること」の意味がこれまでになく重要度を増してきたのだ。日本も日本人も変わりつつある、あるいは変わらなければならないということだろう。

ところで、レトリックの勉強をしたことがありますか。
（のうち りょうぞう・関西外国語大学教授）

もうすぐ20歳、『ジーニアス』の新たな進化

——改訂の大きな方針



南出康世

OED と『ジーニアス英和辞典』

『オックスフォード英語辞典』の現行の書籍版は第2版(1989)である。NED(1928)改名のOED初版(1933)が12巻+補遺1巻で、第2版が全20巻であるから、大改訂のように考えている人は多いが、巻数が増えたのは、1933年の補遺を取り入れた新補遺4巻(1972-1986)が加わったため、本文の内容そのものは初版とあまり変わっていないのである。現在もOEDの名声不衰えなのは、新補遺によって新語を大幅に追加して、時代の要請に答えていることはもちろんであるが、母胎となった初版の記述がしっかりしていたためである。現在第3版に向けての改訂がオンラインで行われている。これは文字通り全面改訂である。

さて、OEDと同じようなことが『ジーニアス英和辞典』にも言えるのではなかろうか。『ジーニアス』の初版は1988年である。その後、第2版(1994)、第3版(2001)と改訂を重ねてきた。しかし、OEDと同様、本体の中味自体は初版以来それほど大きく変わっていないのである。『ジーニアス』が常に英和辞典のトップランナーであり続けてきたのは、改訂の都度、新機軸を盛り込み常に時代の要請に答えてきたことはもちろんであるが、小西友七編集主幹が心血を注がれた初版の記述がしっかりしているためである。しかし最近20年の時代の変化、英語の変化はすさまじい。いかに強固たる母胎であってもほころびが出てくる。そこで『ジーニアス』の、G4に向けての全面改訂である。

コーパスの構築と基礎作業

改訂に向けて大きな準備をした。『ジーニアス英和大辞典』と『ジーニアス 第3版』(G3)の時代からすでに独自のコーパス(4千万語)を構築していたが、今回の「ジーニアス・コーパス」(1億語)はこれとは別のアメリカ英語のコーパスである。すでに、イギリス英語中心のBNC(1億語)、Collins WordbanksOnline(5千万語)が利用可能である(有料)。著作権の問題があってもいずれのコーパスからも直接引用はできないが、英米語の比較・頻度・変異形・コロケーションを調べるのに強力なツールとなった。また桁違いのスケールをもつ検索エンジンGoogleもAdvanced Google Searchを使えば、フレーズ/文単位の検索も可能で大まかな傾向を知る上でコーパスとして利用できる。サイトの絞り込み検索によってかなり精度の高い検索も可能になった。こういったコーパスとさまざまな語彙頻度調査を参考に、G3の下記の項目を徹底的に見直し、21世紀の英語をより正確に反映するよう全面改訂した。

1. 収録見出し語(主見出し語・下位見出し語)
2. 収録語義
3. 語義配列
4. 頻度表示
5. スピーチラベル

語義配列について簡単にふれる。G3までは語義配列は「語義の流れ」重視の配列であった。これだと全体の語義を見渡すのに便利だが、あまり頻度の高くない語義が上位に來たりしていた。し

かし、一般的にあって、ユーザーは上位の語義を頻度の高い重要な語義と捉える傾向がある。この点を考慮して、今回の改訂では語義配列の基準を頻度とした。こうしてみると、当然のことながら、(正式)とか【物】といったラベルの付いた語義は特定のテキストタイプに偏在するため、テキストタイプにかかわらず遍在する一般語義の低位に来ることが語義配列で明示された。

コーパスの限界：専門語義・専門用語の扱い

しかしコーパスに準拠すると多くの専門語義・専門用語は居場所を失う。どうすべきか。

最近の電子辞書には国語辞典、英和・和英辞典に加えてマイペディアのような百科事典が搭載され、これら複数の辞典・事典を一括検索ができるようになり、検索の目的も多様化してきた。そして理科系、文科系を問わずさまざまな分野の学生が専門用語、術語の検索に電子辞書を利用するようになった。これに一役買っているのが英和辞典である。英和辞典は紙の辞書から出発するから、スペースの制約で、専門分野名と訳語しか載せられないことが多いが、それだけでも、まず専門分野の用語であることが確認でき、訳語からある程度、用語の中味を推測できる。載せている意義は大きいのである。EFL / ESL 辞典は概して専門用語をほとんど載せていないのだが、『ジーニアス』はこれまで専門語義、専門用語の収録を重視してきた。G4 では、別途、専門家に検討を依頼し、結果として従来通り専門語義、専門用語収録重視の方針を堅持することになった。この点でG4 はEFL / ESL 辞典と一線を画しているのである。

語法情報の充実と文法コラムの新設

語法・文法・コロケーション情報のさらなる充実ぶりをいくつか紹介しておこう。

コロケーション 動詞+around のコロケーション

㊦ン：特定の動詞と結びつくとマイナスのイメージをとまなう「付き合い」を意味する：Her husband is **hanging around with** a guy who is openly gay. (彼女の夫は一目でゲイとわかる男と付き合っている)/ Don't be **fooling around with** girls. (女の子と遊び歩くのはやめなさい)/ I'm going to stop **running around with** those guys. (あの連中と付き合うのはやめようと思っている)。go around には特に悪いイメージはない。She used to **go around with** Sam all the time. (彼女はサムと始終出歩いていた)。cf. I've known him since I was a child. (彼とは子供の時から付き合いです)。

類語比較 **besides, except, apart from, other than** : besides は追加「～に加えて」、except は除外「～を除いては」の意で用いる。apart from, other than は追加と除外の両方に使える：There are two children in my family **besides** [apart from, other than, *except] me. (私の家族には私以外に子供が二人いる)《英語では「私に加えて」と発想する》/ I have been to every country in Asia **except** [*besides, *apart from, *other than] China. (私は中国を除いてアジアの全ての国に行ったことがある)。否定文ではどれも使える：He has no friends **except** [besides, apart from, other than] Tom and Bill. (トムとビル以外彼は友達が無い)。

さらに、G4 では新たに、生成文法、認知言語学などの知見を取り入れた文法コラム(二重目的語構文、結果構文、繰り上げ構文、V+one's way 構文、能動受動態など)を設け、事物(entity)・モノ(thing)・関係(relation)を視覚化した図を用いるなど、言語学と辞書学の融合を図る試みをしたことを付け加えておきたい。

(みなみで こうせい・大阪女子大学名誉教授)

誤りから学んで、積極的に発信！

——語法について



南出康世

はじめに

学習辞典が受信情報のみならず発信情報も載せ、ユーザーのニーズに応えるのが *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (1942) 以来、常識となった。しかし学習英和辞典の語法・文法情報の基準は辞書によってばらばらで、その多くは「編者の視点 (compiler perspective)」からなされており、ユーザーのニーズを満たしていない内容のものも少なくない。学習英和辞典はユーザーの視点に立って、発信のための実用的な語法・文法情報をできるだけ多く提供しなければならない。以下、「さらに語法に強くなった G4」の語法に対する基本姿勢を紹介する。

1. 日本人学習者の言語的誤用 (linguistic error)

日本人学習者に特徴的に表れる誤りには大きく分けて2つのタイプがある。1つは言語的誤用 [統語, 形態, 発音上の誤り], もう1つは語用論的誤用 (pragmatic error) [談話のストラテジーの誤り] である。この2つにはそれぞれ「日本語の干渉に起因する誤用」(interlanguage error) と日本語の干渉によらない、いわゆる「言語内誤用」(intralingual error) がある。

「日本語の干渉による言語誤用」(e.g. 「家をリフォームする」*reform a house / 「(体重が) リバウンドする」*rebound など) については独自の調査を行い、G4ではこの方面の記述はさらに強化された。最近では「学習者コーパス」の普及に伴い、より大規模に、より組織的にこの方面の研究が進みつつある。G4ではコーパスのみならず、

日本人に英語を教えた経験のある、そして同時に日本語にもある程度精通している英語ネイティブ・スピーカーの直観と判断をデータとして利用し万全を期した。

直接母語干渉に起因しない言語的誤用、即ち「言語内誤用」にはいくつかのタイプがあるが、スペースの都合で2例のみあげる。

- (1) 「私のことは心配しないで下さい」×**Don't be anxious** about me. [通例 **Don't worry** [**Don't be worried**] about me. で, anxious は She's extremely anxious about her exam. のように「成り行きや結果が心配」の文脈で用いるのが普通]
- (2) **I thought so.** は文字通りには「私はそう思った」で **I think so.** (私はそう思う) の過去形だが、しばしば疑念が的中したときに用い「思った通りだ」「そらみる」といった非難めいた発話の力を持つ。

「言語内誤用」を考える点で、native-like selection / native-like fluency という概念も重要である。たとえば、パーティーの予定があって、「ハリーを連れてきてくれるとありがたいです」と誰かに言う場面では、(3)が普通で(もちろんほかに自然な言い方は多数ある)、(4)(5)は文法的には正しいが不自然である。

- (3) I'll be glad that you could bring Harry.
- (4) That you could bring Harry will gladden me

so much.

(5) Your bringing of Harry will cause me to be so glad.

英語には(3)のような lexical phrase (決まり文句) が多数あり、ネイティブ・スピーカーは場面に応じて必要な型をそのまま、あるいは適当に語彙を入れ替えるだけで無意識的に「選択」という。これを用いなくて、文法規則を操作して文を創造すると、(4)(5)のように文法的だが不自然な文になり「流暢さ」から遠ざかるのである。G4ではこの lexical phrase の収録にさらに力を入れ、ますます高まるオーラル・コミュニケーションのニーズに応える情報を盛り込んだ。

II. 語用論的誤用

日本語圏では物を贈呈する場合、しばしば「お気に召さないかもしれませんが,」「そんなものをいただくわけにはまいりません」といった発話が生じる。我々はこのような場面における解釈ルールを身につけているので、発話の意図を正しく理解できるが、この談話のストラテジーを英語に持ち込んで I'm afraid you don't like it. のように言うと支障が生じる。

一般的に言って、ネイティブ・スピーカーは外国人が犯す言語的エラーに対して寛容的である。例えば、我々が We went swimming to the river. と言っても、「川へ泳ぎながら行った」という意味に取られる可能性は少ない。in と to の混同であろうと推測してくれる。

しかし、言語のパターンを認識している英米人でも談話のストラテジーの相違にまでは気が回らないのが普通である。従って、I'm afraid you don't like it. は英米人にとっては文字通りの「お気に召さないかもしれませんが」という意味でしかありえないので、このようなことを言って贈り物をする日本人は「変な日本人」の烙印をおされかねない。日本語にはこのように本音を建前に先行

させる談話のストラテジーは存在しないことはないが、きわめて影が薄い。このように語用論的誤用は言語形式面だけでなく社会的・文化的行為と密接に関連するので、単に「こう言わない」という皮相的な記述だけでは不十分である。

次に「言語内誤用」の例をあげる。たとえば、“Please read this paper and give me your comments.”である。これは文法的には問題はないが、依頼される側は過大な負担を押し付けられた感じがするようである。そのような場合、少しでも負担が軽くなるように表現するのが依頼のストラテジーである。“Please have a look at this paper...”のように言うと、日本語の「ちょっと」の気持ちが加わって丁寧さが増すようである。G4ではこの種の語用論的情報を随所に入れ、ユーザーの便を図った。

おわりに

EFL 学習者にとって、文法規則や文型に従って文を生成する文法能力を養成することは不可欠であり、また一方では、英語表現を「未分析のかたまり」(unanalyzed chunk)として、その語用論的機能を含めて学習することも不可欠である。G4はこの2つのニーズをできるだけ満たすよう最大の努力をした。

さらに、G4では以上見てきた「学習者が誤りやすい語法」に加えて、他の辞典では取上げていない最新の語法 (e.g. **The thing is** is no one wants to take responsibility for paying for it all. (s.v. *thing*)/ **India has among the highest** saving rates in the world. (s.v. *among*)/ **I can not not** take your advice. (s.v. *can*)) も多数解説した。「さらに語法に強くなった G4」に皆様の温かいご支持を乞う次第である。

(みなみで こうせい・大阪女子大学名誉教授)

G4 用例改訂日記



中邑光男

〇〇年△月×日：Get ready, get set...

『ジーニアス英和辞典 第4版』(G4)の編集会議。過去最大の改訂を施すという方針のもと、用例も全面見直し、大幅書き換えをすることに決まる。そのメイン担当は私だ。

「用例は辞書の命」とも言われる。心して取り組もうと思います。

〇〇年△月×日：G4C

1億語の米語から成るコーパス、G4C(orpus)がついに完成した。これは私がG4の用例のために独力で開発したものだ。

コーパスでは1億語から成るBNC(=British National Corpus)が有名だ。しかし、同規模の米語コーパスはまだ存在しない(American National Corpusは開発中)。米語が日本の英語教育の中で占める重要性を考えれば、米語コーパスはどうしてもほしい。そう考え、作り始めた。

作成上の方針は次の通りだ。

- (1) 1億語の米語から構成する。
- (2) 2000年以降にアメリカで発行された新聞・雑誌、放送された番組の英語から作成する。
- (3) 一般のアメリカ人が見聞きするテレビ番組やUSA Todayなどの比較的平易な英語を重点的に収集する。

完成には編集委員、編集部も喜んでくれた。G4編集作業において、G4Cは重要な情報源になるだろう。特に発信の点から重要な語彙について、コロケーションを特定化するのに力を発揮す

る。一例を挙げれば、見出し語 notion では次の情報を提供することが可能だ。

The middle-aged tend to *have preconceived* ~s about young people.

中高年者は若者に先入観を抱きがちである。

このように、G4CのおかげでG4のコロケーション情報がさらに充実する。G4Cの生みの親としては嬉しい限りです。

〇〇年△月×日：Two sides of a coin

コーパスを使ったコロケーションデータの収集作業が本格化している。G4CとBNCの調査結果には興味が尽きない。発見の連続だ。

しかしG4編集に携わる私たちに共通している考えは、「コーパスへの過度の期待は禁物」ということだ。「コーパス時代」の今だからこそ、これは肝に銘じておかなければならない。説明しよう。

そもそも1億語や2億語のコーパスでは、用例改訂の仕事には小さすぎる。そこに見つからない表現だからといって軽く見ることは危ない。G4C、BNCは基本的には「高頻度の単語の『定番』コロケーション」を調べるためのものということが私たちの方針だ。

コーパスに見つからない表現についてももう少し言えば、そんな表現は英語にはいくらでもある。ペーパーバックの小説でも、ちょっと複雑な状況・人間関係を描写する場面になると、語彙が難しくなったり、文構造が複雑になったりする。卑近な例を挙げれば、試験問題文も「ふつうの英

語」だけということはない。「ふつうの英語」だけを勉強しても、「本物の英語」には歯が立たない。従って、私はG4の用例には、BNCやG4Cにない表現があってもよいと考えている。

まずはネイティブスピーカー(NS)による徹底的なチェック。それとコーパスを組み合わせ、相補わせることによって、用例改訂作業を進めます。

〇〇年△月×日：My dream team

用例改訂チームの初会合が開かれた。集まったのは、日本人とNSの執筆者。次のような点を考慮してメンバーを選んだ。

まず、日本人執筆者について。彼らに求められる力は、高い英語運用能力、幅広い英語学・語法の知識、豊富な教育経験など幅広い。

中でもNSと仕事をする際にリーダーシップを発揮できるかという点は重要だ。G4は日本人英語学習者のための辞書。NSの多種多様なコメントのどれを採用するかは、日本人英語学習者のニーズを熟知している私たちが判断しなければならない。この点、英語教育現場に精通されている山田正義先生と岡本真由美先生が参加して下さることは、本当に心強い。

一方、NS執筆者の人選には少々苦労した。私が設定した条件は、(1)辞書作りに情熱があること、(2)勤勉であること、(3)日本語力のあること、(4)英語力のあることだ。(1)と(2)は当然としても、では、どうして(3)と(4)なのか。

(3)を加えたのは、日本語と格闘したことのないNSが、G4の利用者に共感を覚えるはずがないからだ。コーパス、電子辞書が全盛の現代だが、辞書は人が作るもの。執筆者の気持ちや態度は、辞書からにじみ出る。

(4)については、米国留学中に恩師がおっしゃったことばを思い出す。「英語の質問は、読書量の豊富なNSにすること。NSなら誰でもいいわけではない。君は多くのNSよりも英書を読んでいるのだから、とりわけ注意するんだよ。」

今日出席した、アメリカ人、イギリス人、カナダ人、オーストラリア人から成る執筆者チームを見れば、恩師も安心してくださるだろう。

会議では執筆者に大まかな用例改訂の方針を伝えた。次はその一部。

- (1) 原則として、用例は発信型英語にも役立つ情報だと考える。読んで分かればよい語彙・語義には必ずしも用例を与えなくてもよい。
- (2) NSが「意味は分かるが、今まで見たことのない英語」と指摘する用例は改訂する。
- (3) コーパスにおいて高頻度の表現を積極的に掲載する。ただし日本人にとって有用な英語は、頻度が低くても、用例に含めることがある。
- (4) 「仕事で使える英語」の用例を増やす。生徒たちが社会人になっても使える辞書を目指す。

今日は、用例改訂の「ドリームチーム」が発足した日。嬉しい記念日です。

〇〇年△月×日：Go the distance.

leave という見出し語に次の用例がある。

I left my umbrella in [on] the bus yesterday.
きのうかさをバスの中に置き忘れた。

多くの英語教員は、「話者が『バスの中』と意識している場合はinを使い、そうでない場合はonを使う」と説明するだろう。しかしこの説明で本当に大丈夫だろうか？

ネイティブスピーカーから戻ってきた原稿を見る。修正のないもの、inを削除しているもの、反対にinがふつうと書いているものがある。このように意見が割れると、自信がなくなる。原稿に書かれたカナダ人の意見を引用しよう。

I would say that we travel “on the bus” but “I left my umbrella in (side) the bus” refers

more specifically to the location of the umbrella. However, I believe people would probably say, “I left my umbrella on the bus.”

「自分は in を選ぶが、他人は on を選ぶかもしれない」というところが気になる。

そこで詳しい説明を求めて、米人執筆者に会いに行った。彼は言う。「忘れ物をした直後は『バスの中』のどこに忘れたのだろうと考え、in the bus と言うね。しかし自宅に戻って家族から、「また傘忘れたの。会社で？コンビニで？バスで？」などと聞かれると「バスの中」のどこという意識が薄くなり、他ではなく「バスで」という意識が強くなる。その時は on the bus を選んだ。」

やっと分かった。用例を次のように変更する。

I left my umbrella on [in] the bus yesterday.
きのうかさをバスに[の中に]置き忘れた。

このような前置詞の提示順や日本語の細かい使い分けにも注意を払っていることを、逐一文字面から読み取ってもらえるわけではないだろう。が、こうしたことの累積が全体として辞書に与える影響は小さくないはずだ。妥協してはいけません。

〇〇年△月×日：SWIM

英語をある程度勉強すれば、NS が指摘したことに意味付けすることは可能であろう。ところが NS が指摘することを予想し、間違いを未然に防ぐことは困難だ。

自分の英語力よりも下のレベルの問題点はよくわかる。しかし、少しでも上の問題点は、見当すらつかない。私はこの現象を SWIM (指摘されるとわかるが、言われないと全くわからない) と呼ぶ。

見出し語 congratulation の、

I offer you my ~s on your success in the entrance examination.

入試合格のお祝いを申し上げます。

という用例の検討中、この SWIM を経験した。

G4 に掲載する用例は全て NS が目を通すのが決まり。この決まりを厳密に実行するためだけに NS に見てもらった……はずだった。

ところがこの文を米人が次のように修正したのだ。I offer you my ~s on your success **on** the entrance examination.

どうして success on なんだ。success in ... で「…における成功」という意味のはずだ。NS の不注意に違いない。そう考え彼に再確認したところ、次の返事が届いた。

To me, it is far more common to say “success on an exam” than say “success in an exam”, because the paper is physical. But if the speaker is thinking of the exam NOT as a paper, but as the ACT of testing, then they’d say IN.

これでもまだ納得がいかない。そこで、別の米人に意見を求めた。彼も同じ見解だった。

A doctor’s physical examination or a performance based test might be “in” but for a paper test, “on” is more common.

NS が success on を提案したとき、私には in や on の前置詞本来の意味が思い浮かばなかった。機械的に success in と覚えたからだ。SWIM の典型的な例だ。

I offer you my ~s on your success on [in] the entrance examination. 入試合格のお祝いを申し上げます。《◆ on は試験用紙、in は受験という行為に焦点を当てた言い方》

と書いて、今日の仕事は終了。

明日も NS を質問攻めにするとしましょう。

(なかむら みつお・関西大学教授)

変わりゆく英米の英語発音を追って

—G4の発音表記の特色



南條健助

私が『ジーニアス英和辞典』の発音表記を担当させていただくのは、改訂版(1994)、大辞典(2001)、第3版(2001)に続いて、G4で4度目となります。今回は発音表記を全面的に見直し、大幅な加筆修正を行ったほか、使用されている発音記号に関しても初版(1988)以来最大の改訂を行いました。例えば、大辞典と同様に、短母音の/i, u/という記号を、より精密な/ɪ, ʊ/に変更したことも、その1つです。その他の改訂のポイントは次の通りです。

① lot や problem などに含まれる米音の/a/という記号を、father や palm の母音と同じ/a:/という記号に変更しました。従来は、両者に長短の区別があるように言われていましたが、実際には前者も長めに発音され、標準的な米音では、両者は同一の母音であるというのが事実です。

② caught や law などに含まれる米音の/ɔ:/という母音に、逐一/a:/を併記しました。今日、米国の多くの方言において、/ɔ:/の代わりに/a:/を用いる話者が増えているからです。ただし、米国方言の権威である William Labov 教授(私信)によれば、現時点ではまだ米国人の過半数に達していないとのことで、(米+)として示しました。

③ arrow や carry などに含まれる米音の/æ/という連鎖を/er、(米+) æ/と表記しました。今日の米音では、/r/の前の/æ/は/e/で発音される方が一般的だからです。米国内ではもはや少数派ですが、/æ/と発音する方言もありますので、それも(米+)として併記しました(英音は/æ/です)。

④ what, where, white などにおける wh- という綴り字の発音を/w-, (米+) hw-/と表記し、英米共に/w-/の方がより一般的な発音であることを示しました。従来は、/hw-/という表記が用いられ、英音で

は/h/を発音しないが、米音では発音すると言われていましたが、今日では米音でも/h/を発音しない話者の方が多数派になりました。

⑤ Tuesday, tune や due, reduce などに含まれる英音の/tj, dj/という連鎖に/tʃ, dʒ/を併記しました。例えば durable には、/d(j)ʊərəbl/のほかに、(英+)として/dʒʊ:rəbl/という発音も載せました。これは最近、若い世代を中心に、英国で急速に広まりつつある新しい発音であり、音声学者の John C. Wells 教授(私信)は、日本人学習者もこのように発音して差支えないと述べています。

これ以外に、英音では、「割り込みの r (intrusive r)」と呼ばれる綴り字にない/r/が入った発音を併記した語もあります。例えば drawing には、(英+)として、/drɔ:riŋ/という発音もあることを示しました。このような発音を耳にした際、日本人学習者には drawling との聞き分けが難しくなります。また、「割り込みの r」が入ると、sawing と soaring は、どちらも/sɔ:riŋ/と発音され、両者は同音になります。「割り込みの r」は、英音の聞き取りにおいて不可欠な知識ですので、適宜これを示しました。

このほか、今回の改訂でも、個人的に付き合いのある英米の著名な音声学者・言語学者から、最新の英語発音辞典にもまだ載っていないような貴重な音声事実を提供してもらえたので、実際のくだけた発音なども含め、変わりゆく英米の英語発音を、正確かつ豊富に表記することができました。目下、英米で増えつつある strong の /ʃtrɔ:(:)ŋ/ という発音なども、その一例です。今回の改訂によって、G4 は、まさに「発音のジーニアス」と呼ばれるにふさわしいものになったと自負しています。

(なんじょう けんすけ・桃山学院大学文学部助教授)

語の意味をつかみやすくするための工夫

——類語比較, 前置詞イメージ図, 語義展開図

東森 勲
勝 啓一

『ジーニアス英和 第4版』(G4)では、語を記憶・理解する助けとなるような要素を大幅に増やした。例えば、多義語の各語義の意味のつながりを明示し(語義展開図)、類語の意味の「守備範囲」を鮮明にし(類語比較)、前置詞の意味を視覚化した(前置詞イメージ図)。これらを利用して、語の把握にとどまらず、広く運用・発信にまで役立てていただければと考えている。

■類語比較

英語にはよく似た語の組み合わせが多い。類語同士にどんな意味や用法の違いがあり、どのように使い分けたらよいか迷う学習者も多いだろう。そこでG4では新たに「類語比較」の欄を設けた。G3までも「語法」で扱っていたが、独立し、比較する語の組み合わせ数を増やしたものである。

その例を2つ、かいつまんで紹介したい。

start と begin はともに動作の開始を表すが、start がその後も運動が続くことに焦点があるのに対し、begin は開始の瞬間に焦点がある：The car's engine started [^{*}began]. (車のエンジンがかかった)。

destroy と break はともにものを壊すことを表すが、destroy は修理不可能・存在不能になるくらいに破壊することであるのに対し、break は外部から力を加えて誤ってあるいは故意に一瞬のうちに2つ以上に壊すことである：The World Trade Center towers were destroyed [^{*}broken] in the 9-11 terrorist attacks. (ワールドト

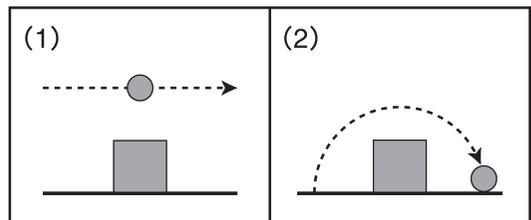
レードセンターのタワーは9.11のテロリストによる攻撃で破壊された)。

loud と noisy はともに物音がうるさいことを表すが、loud は音量が時に不快感を与えるほど大きいことを表す一般語であるのに対し、noisy はさらに、複数の音源から出る音が騒々しいの意味を含む：My neighborhood is very noisy. (近所がとても騒がしい)/ My neighbor's TV is very loud. (近所のテレビの音がとてもうるさい) ◆◆音源は1つ)。

■前置詞イメージ図

前置詞は多義であり、語義をすべて把握することは学習者には困難であろう。そこでG4では、認知意味論の考え方を援用し、前置詞の基本義や各意味・用法のイメージ図を適宜示した。

over を例に挙げると、これは弧を描いて対象物の上を移動するのが中心義といえるが、意味・用法によって、移動経路の違う位置が強調される。(1)「真上に」の意では経路の真上の位置が強調される(The plane flew over our house.)、(2)「上を越えて」では経路で真上の位置を通過したことが強調される(jump over a brook)、(3)「全体を覆う」では経路であるものの上をずっとカバ



ーしているの、経路全体が焦点を受ける (spread a cloth over the table), (4)「超えて向こう側に」の意では経路の最終点が強調される (We live over the road.), など。

G4 では above と比較しながら図を示した。全部を紹介する紙幅はないので(1)(2)だけを挙げる。

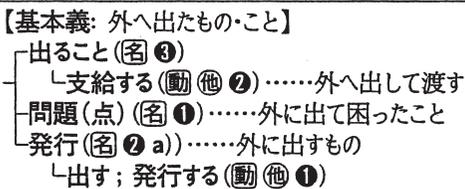
(ひがしもり いさお・龍谷大学教授)

■語義展開図について

G4 に「語義展開図」(以下「展開図」)を導入したのは、学習者が多義語におけるそれぞれの意味を理解・記憶する際の負担を軽減したいという願いからである。多義語の複数の語義は、ともすれば学習者には一見バラバラで、何を中心においてその単語を見るべきかわからない場合がある。そのような困難を少しでも解消したいと考えた。

展開図の構成は、初めに「基本義」(コアとなる意味)を置き、それからの各語義への展開を線分によって示し、簡潔なコメントを語義の後ろにつけて語義展開の背景にある論理を説明するというものである。

例として issue の展開図をあげる。



G4 では基本義がある語にも必要に応じて原義を載せていることから、原義も踏まえながら各語義をカバーするような基本義を設定することにしたのである。これはかつて Bolinger が“a single overarching meaning”と呼び、最近ではコアと呼ばれる①用例の最大公約数的な意味であり、かつ、②語の意味範囲の全体を捉える概念を目指したものである(詳しくは『英語感覚が身につく実践的指導——コアとチャンクの活用法』を参照ください)。

実作業の第一段階は展開図をつける語の選定で

あった。おおよその基準を太字語義が4つ以上の A・B ランク語とし、4つ以上あっても1つ2つの意味に還元できるもの (send 等) は外し、逆に太字語義3つでも語義間の関連が見えにくいもの (association 等) は選んだ。この作業に当たっては、校正刷りすべてのページに目を通して太字語義を目で追い、上記の基準を満たす語を拾い出した後、さらに編集部と取捨の検討を重ねた。

次が最も肝腎な「基本義」の設定であった。すべての太字語義を包括していなければならず、この設定により展開の仕方も変わってくる。様々な先行研究を参考にさせていただいた。語のイメージを解説した『英語語義イメージ辞典』、そして『スタンダード英語語源辞典』『メモリー英語語源辞典』の両語源辞典がとて役に立った。

それから各語義の右側に基本義との関係を示すコメントを付けていったわけだが、教室での説明と違い字数制限があることに悩まされた。なにしろ、語義、品詞(番号)を示して残ったわずかなスペースしかない。このことは基本義の設定にも影響を与えた。先の issue など多くの語は基本義が原義とつながるが(issue の原義は「外に出る」)、語によってはそれでは語義説明のコメントが限られた字数ではできないものがある。例えば stock は一番元の意味が「幹」だが、これを基本義にすると、ここから「在庫品」「貯蔵」「株」といった語義を限られた字数で説明しにくい。そこで基本義を「蓄え」としたのだが、こういうケースもあった。

展開図が表しているような多義語に対する説明は、先生方が教室で日常的に行っているものと思われるが、学習者が「単語は闇雲に覚えなければならぬもの」といった思いこみから解放され、「この意味とあの意味はこんな関係になっているのか」「この単語はこんなイメージで捉えたらよいのか」というように、自ら興味を持って英語の世界に踏み込む一助になれば幸いである。

(かつ けいいち・滋賀県立大津高等学校教諭)

コーパスと直観の融合

—G4 への期待



石川慎一郎

1. データと直観

『ジーニアス英和辞典』が世に出て今年で20年目になる。『ジーニアス英和辞典』は、改訂のたびに、その最大の特徴である精緻な語法記述に磨きをかけ、いまや、英和辞書のみならず、世界のEFL辞書をリードする存在の1つとなっているが、このたび、コーパスを活用した「史上最大の改訂」を経て第4版（G4）に生まれ変わるといふ。

良い辞書の定義は難しいが、一言で言えば、データと直観、客観と主観、規範と記述の融合が果たされているか否かであろう。データだけでも直観だけでも良い辞書はできない。それらがうまくまざりあって初めて辞書は真に有用なものとなる。

かつては、経験を積んだ辞書学者が、内外の研究成果をふまえつつ、自らの直観によって一貫した言語の規範を組み立ててゆくというのが正統的な辞書の作り方であった。第3版（G3）までの『ジーニアス英和辞典』はこうした辞書学の伝統を色濃く継承する辞書であったが、G4は、コーパスの活用によって、新たに、データに基づく客観的言語事実の記述という魅力を加えたことになる。「コーパスと直観の融合」がどのような果実を生み出すのかに期待が高まる。

近年の英米の主要辞書は、その多くがコーパスを積極的に活用している。大量の英語データを客観的に分析することで、時には母語話者自身ですら気づいていない語のふるまいを解明するコーパスは、1990年代以降の英米（とくに英）の辞書編

纂を一変させたが、G4の誕生によって、英和辞書の世界においても本格的なコーパス活用の時代が到来したと言えよう。

2. 語義の配列

G3は、伝統的な辞書編纂法の到達点に位置する著作であるが、この20年間の英語学習者の多様化は著しく、G3を十分に使いこなせない学習者が増えていることも事実である。辞書を苦手とするこうした初中級の学習者を観察していると、現行の辞書の語義配列にも問題の一端があるように思われる。

たとえば、名詞 challenge を例に考えてみよう。“the challenge of teaching novice learners”——これはある論文の一節であるが、学生と論文を読んでいて、彼らが一様に「初級学習者を指導するという挑戦」と訳すことが気になった。G3をはじめ、大半の英和辞書では「挑戦」が challenge の第1語義となっているが、教師にとって入門期の学習者を指導することは日々の営みであって、「挑戦」ではいささか大げさである。

この場合は、COBUILD⁴が第1語義にあげている“A challenge is something new and difficult which requires great effort and determination.”（challenge とは、新しく困難な物事のことで、多大な努力と重大な決意を必要とするものである）、または OALD⁷の第1語義である“a new or difficult task that tests sb’s ability and skill”（能力や技術が問われるような、新しい、または困難な課題）のほうが文脈にじっくりくる。

もちろん、下まで読めば、G3にも「(やりがいのある)課題、難問」という語義があがっているのだが、大多数の学生は、第1語義を見て意味が通りそうだと、第2語義以降を見ることはほとんどない。つまり、学習辞書が真にユーザー・フレンドリーであるためには、「必要な語義が載っているかどうか」のみならず、「どの位置に載っているか」が問われることになる。

筆者の手元のコーパス・データを見る限り、challengeについては、カタカナ英語の「チャレンジ」から連想される「挑戦」という意味合いよりも、具体的な「課題、難問」という意味が優先されるべきであるように思われる。コーパス頻度をふまえた語義配列の見直しは、こうした細かな点にまで及ぶなら、辞書は学習者にとって、いっそう使いやすいものとなろう。

3. 語義の展開

語義記述にあたって、コーパスから得られた頻度データに立脚することは、辞書の検索性を高める上で効果的な措置であるが、頻度は決して万能の尺度ではない。とくに多義語については、頻度順に意味を羅列しただけでは、意味と意味のつながりや、語の持つ中核的な意味合いが曖昧になるという恨みがある。

語義配列には、頻度に加え、英語史的な意味の派生順序や、認知的な意味の展開順序などの要素も複合的に関与する。このため、語義をわかりやすく配列し、提示することは、長年にわたって辞書執筆者を悩ませてきた、まさに“challenge”の1つだったのである。

この点に関しては、G4で新たに導入されたという「語義展開図」が目される。たとえば、名詞accountを例に考えてみよう。G3でaccountを引くと、勘定書、(賃借)勘定、報告、考慮、重要性、理由…などの意味が並んでいるが、初級学習者の目線で見れば、関連性の薄い語の羅列に過ぎず、そもそも、なぜ、「勘定書」と「報告」

と「考慮」が同じ単語の意味として存在するのか判然としない。

しかし、形態論的に考えれば、accountはcount由来の語であり、これらの意味は、原則としてcount(数える)から派生したものと考えられる。つまり、経理上の数字を数え上げることが「勘定」であり、ある事象に関連する事実を人前で数え上げることが「報告」である。また、対象となる人や物を、忘れて無視したりせずに、正當に数え上げてやるのが当該対象への「考慮・配慮」となる。

こうした認知的な意味の展開の順序は、必ずしも客観的な頻度データとは一致しない。ゆえに、頻度に基づく語義配列を徹底すれば、結果として、自然な意味派生から乖離した語義順序になることもありうるが、加えて、語義の展開過程を図解することができれば、学習者の理解はより立体的になる。

学習者は、「語義展開図」を手助けとして、語義欄に記載された断片的情報を相互に関連させ、accountという語の総体や、語の中核の意味を掴み取ることができるであろう。「account=勘定」という単語集的な断片知識ではなく、「account=具体的・抽象的な各種の数え上げる行為や、数え上げられるものの総体」という高次のレベルでの認識こそが、学習者が持つべき語彙知識である。

「語義展開図」のような試みが言語教育の点で効果を挙げるためには、個々の語義情報を大胆に整理・範疇化し、範疇間の関係性をわかりやすく表示することが不可欠である。これは、コーパス・データだけでなすうることではなく、経験を積んだ辞書学者にのみ可能なことである。

G4という新しい辞書の誕生によって、コーパスに基づく客観的言語データと、それを補う執筆者の直観との「幸福な結婚」が果たされ、日本の英語学習者にとっての新たな道標となることを期待したい。(いしかわ しんいちろう・神戸大学助教授)

G4 ができるまで

——編集工程アラカルト



校閲について

小林資忠

『ジーニアス英和辞典』の初版発行は1987年だから、すでに19年が経つ。この間、語法を中心に様々な改良を行ってきたが、今回の第4版(G4)ではこれまでで最大の全面改訂を施した。語義展開図やシノニム欄などの新しい「目玉」については当該の項などを参照していただくとして、本稿では校閲者の立場から、主に、コーパスをいかに利用したかについて述べたい。

もちろん用例などはコーパスのみで編集をしたわけではないが（こちらも別稿参照）、辞書全体に関係する大きな変化として、コンピュータ・コーパスを多方面にわたって使用したことはやはり特筆に値するだろう。特に校閲にあたっては、現在の語彙の使用頻度をいつも念頭に置いた編集を行った。今までの多少散発的なコンピュータ・コーパスの使用に比べ、G4での徹底的な利用には目を見張るものがある。1億語を超えるアメリカ英語に基づいたG4コーパスを構築し、すでに機能しているBNC、Googleなども参考にした上での辞書記述は、各語彙の現在の使用状況をより客観的に、しかも的確に示すことになり、より信頼の置ける辞書になったはずである。

見出し語のランク（A～D）の見直しや語義の頻度順による提示は、コーパスを中心に調査した成果である。G3から引き継ぐ用例やG4からの新規用例については、当然ネイティブチェックを受けながら検討を重ねたが、その提示の仕方は、コーパスの頻度データに基づき、学習英和辞典として最も妥当と思われる典型的な形で示すよう注意を払った。

例えば、用例中の名詞、形容詞、動詞などの類義語の配列、前後に続く前置詞や副詞の配列は、コーパスを尺度として頻度の高いものから順に並べてある。名詞 glance ①の「ちらりと見ること」の用例に She

cast [shot, threw] a disapproving glance at me. があるが、最初の cast が最も連結の頻度が高い動詞ということだ。動詞 grab ①の用例、He grabbed me by [in, at, on] the collar. に見られる前置詞の配列でも、by が最も頻度が高いということである（実際は by とそれ以外では頻度に大きな開きがある）。これは特に発信の際に、使用者に役立つ情報だろう。

成句についても頻度を尺度とした削除や追加を行った。例えば、G3では much の成句 How much...? の(2)に「《略式》(相手の言ったことが聞き取れなくて)何ですって(what)」とあったが、この表現は複数のインフォーマントから聞いたことも読んだこともない指摘され、またコーパスによる実例も確保できなかったため削除された。もう1つ、close ④の成句 close to の(5)に「近くに[で]」とあり、I saw him close to. (彼を近くで見た)という用例が掲載されていた。これを裏付ける用例は OALD⁷にも The picture looks very different when you see it close to. として示されている。しかし、英米それぞれのコーパス・データを見ても <see+人+close to> の用例は見つけられず、インフォーマントの意見も「文法的ではあるが、稀な語法で学習英和辞典には向かない」ということであった。つまり、この用法はたとえ OALD⁷に記載されていても珍しい例の1つと考えられ、削除対象になった。

以上、コーパスが辞書編集に大きな影響を及ぼす例をほんの少し眺めてきたが、これからの辞書編集に当たっては、(1)執筆者・校閲者・編集部スタッフの緊密な協力体制、(2)辞書利用者からの建設的な意見や情報の提示、(3)公正な判断のできるネイティブスピーカーの協力に加え、(4)コーパスの適切な利用が必須となり、これらの大きな4つの歯車がうまくかみ合った場合に、信頼のできる、優れた英和辞書ができて上がるような気がしている。（こばやし よしただ・愛媛大学教授）

素読み作業について

垣添朋美

「素読み作業」とは文字通り、校正ゲラの記述内容を読み返す地味な作業である。この作業は、不備な点を見つけることはもちろんだが、合わせて、さらに改善するための指摘をすることが求められる。その際の視点は、「使用者（特に高校生）が理解できる内容であるか」というものである。ふだん高校生に英語の指導を行っている経験を活かし、学習者に使いやすい辞書への改良を目指すのである。素読みにあたって特に重視したポイントをいくつか、以下に紹介したい。

1. 語法記述の見直し

語法で定評のある『ジーニアス』だが、いくら有用な記述でも使用者に理解されるものでなければ意味がない。そこで、説明の仕方がわかりにくいものや内容が高度すぎるものなどについては指摘し、校閲者による見直しをお願いした。

また、見やすさも重視した。『ジーニアス』では、簡潔な語法解説を語義中の《◆…》で表し、まとまったものは「語法」という形で、赤枠の「囲み記事」の形をとっている。「語義中解説」は語義確認の流れで語法も確認できるという利点がある。しかし、高校生のような学習者にとっては、視覚に訴える「囲み記事」のほうが見やすいようである。したがって素読み作業では、「語義中解説」の中でも学習者に有益と思われるものについては、解説を充実させ、「囲み記事」へ変更した。また、「囲み記事」には可能な範囲で「見出し」をつけ、高校生レベルの使用者にとっても見やすい語法解説になるよう見直しを行った。

2. 語義の見直し

学習者が辞書を引く一番の目的は、語義の確認であろう。そのため、語義の見やすさ、分かりやすさは重要である。『ジーニアス』では、重要語は見やすいよう太字語義による記述がなされているが、素読み作業ではそれらを再検討し、太字語義を追加・変更した。また、特に高校生にとって重要かという観点から、難解と思われる語義については分かりやすい語義に変更し、専門用語で説明不足な語についても、スペースの許す限り《…》による注記を付け加えた。

3. 用例の充実

私自身、普段の辞書指導では、語義のみにとらわれず、用例にも目を通すよううろさく言っている。特に初期の辞書指導では、「用例の中にもたくさんヒントがあるよ」と何度も繰り返す。それは、どうしても学習者は語義のみにとらわれて、和訳の仕方に悩んだり、不自然な語の組み合わせの英作文をすることが多いからである。コミュニケーション能力育成重視の現在の英語教育に適した用例はG3にも多く見られるが、G4においても、コーパスや諸英英辞典を参照した発信に有用な用例への差し替えが行われている。さらに素読み作業では、有用なコロケーションを含む用例が盛り込まれているかに特に重点を置き、それらの用例の最終チェックを行った。

*

今回の作業では、最初に述べたように学習者（特に高校生）にとって使いやすい辞書になるよう努めた。現在のコミュニケーション能力育成重視の英語教育に対応した「発信型」用例、また大学入試対策にも役立つ充実した語法解説など、G4がこれまで以上に英語学習の手助けとなれば幸いである。

(かきぞえ ともみ・大阪商業大学高等学校非常勤講師)

つづり確認調査について

山埜茂彦

「1語か2語かハイフン付きか」については、英英辞典においても記述に揺れがあり、必ずしも実態に即した基準とは言えないようである。編集部では早くから頻度差およびそれを反映した見出しのあり方について検討がなされていた。今回、G4においてそれを実現するため、コーパスと検索エンジンを併用した、つづり確認調査の依頼を受けた。

英系コーパスとしては、The British National Corpus (BNC) World Edition を用いた。米系コーパスとしては、編集委員の中邑光男先生により構築されたG4 Corpus を用いた。各コーパスの内容は本誌の中邑先生の記事を参照いただきたい。検索エンジンはGoogle を用いた。

調査対象は、分離複合語（主に名詞+名詞）、1語化した複合語、ハイフン付き複合語、異綴語とした。例をあげると、上記3媒体で baby sitter, babysitter,

baby-sitter のそれぞれについて出現数の調査を行い、比較検討するわけである。そして、英米による差、頻度差の大小、等によって見出しの表記を見直した。ただし、Google はたとえ allintext: 検索を行ったとしても、商業ベースの簡略化した表記や各時代の文学作品なども含むあらゆる“text”を対象にしているわけで、検索結果（数値、2語とハイフン付きのばらつき）についてもそのあたりを考慮する必要がある。とは言え、ドメイン制約検索のように細分化した検索では語彙の偏りや母数自体の不十分さが否めない。そこで Google の結果については、あくまで傾向をつかむ1つの資料という観点で活用することにした。

BNC が構築されてからの年月を考えれば、新たな表現や使用頻度差が生まれていることも推察されるが、ともあれ英米2つの1億語レベルのコーパスを駆使した調査を網羅的に行い、言語使用の実態を見出しに反映することができた。「どのつづりが一番多用されるのか」という、学習者の素朴な疑問に答えられる見出しの表示ができるようになったことが、最大の成果であろう。

(やまの しげひこ・京都府立嵯峨野高等学校教諭)

ネイティブチェックについて Gerry Shannon

Editing a respectable dictionary like *the Genius English-Japanese Dictionary* takes a lot of courage. After all, many highly knowledgeable people have been involved in creating the dictionary, checking for accuracy and writing example sentences that will be useful to the users of the dictionary. My job has been to change what I feel are errors, poorly written example sentences and removing expressions or examples that I think do not truly represent how the words are used today. In doing this, you are bound to bruise some egos. Well, so be it.

Language is a dynamic system of communication. How words are used changes over time and new words and expressions are constantly being added while others fall out of use. I have tried, to the best of my ability, to keep my editing true to how

English is used today and where I have wanted to make changes, I have consulted references and scholars to confirm my beliefs. When I have found examples, even examples that may have been correct ten or twenty years ago, that are not used today or are used in different ways, I have changed, or removed and replaced them with more useful and more likely examples.

This is a rewarding task because I feel that I am contributing in a significant way to how non-native speakers of English learn to use the language. As an educator, I realize the importance of presenting clear and useful information and not to unintentionally mislead students into believing something is true if it is not. Students must be presented with examples that will clearly and unambiguously guide them in improving and expanding their knowledge and skills. In my editing task, I have always kept the students' perspective in mind in the belief that this will lead to a more useful and accurate representation of how the English language is currently used.

I recommend this dictionary to my students and I recommend it to you. We have striven to present the most accurate and the most authoritative English-Japanese dictionary available today. I hope you enjoy it.

(平安女学院短期大学部助教授)

語法情報のまとめ方

白木晴子

辞書を改訂する作業の1つに、語法情報を見直すというものがあります。一口に語法情報と言っても、辞書には、[SVO doing] といった文型、(米略式) のようなレジスター、〈人が〉のような選択制限、《◆…》で表されている注記など、様々な情報があります。

『ジーニアス英和辞典』は語法情報の豊富さを誇っていますが、この度の第4版への改訂のために大いに参考にしたのが、雑誌『英語教育』の中の“Question Box” (QB) というコーナーです。QB は、読者の皆さんからの語法等に関する質問に答えるコーナーです

が、『ジーニアス英和辞典』の語法情報についての鋭いご意見・ご指摘もたくさんあり、辞書の編集主幹から「次回改訂の際には訂正（検討）します」という約束がなされることもしばしばあります。

紙幅の都合上、2, 3のみご紹介します。

QBでご指摘を受け、語義が間違っていることが判明したことがあります。例えば、contemptは「恥辱、不面目」という語義から、第4版では「軽蔑されること、屈辱（状態）」に訂正しました。また、**前**12では、〔交通〕手段・器具〕にA car runs on gasoline.の例がありましたが、こちらもご指摘を受け、新たに〔動力源〕という語義分類を設けました。

語法情報の見直しは、もちろん、間違いの訂正だけではありません。言葉は変化していくものです。世の中に新語が登場し、辞書に収録語が取捨選択されていくように、語法も時代を経て変化します。例えば、soapはa cake ofをつけて数えると昔は教えられていましたが、この表現は現代英語では稀になってきています。今はa bar ofをつけて数える方が普通です。では、この改訂でa cake ofの表現を削除してしまうのかといえば、そうもいきません。稀ではあれ今も使われる表現であり、また高校の問題集ではまだa cake ofを答えさせるような問題も出題されているからです。結局、第4版ではa cake ofには（やや古）を付して残しました。

このように、現代英語の実態を反映させつつ、少し昔の英語を扱う入試問題にも対応させなければならぬ…。なかなか難しい問題です。こうして、誰も気づかないところで様々な葛藤を繰り返しながら、辞書は改訂されていくのです。

（しらき はるこ・大阪国際大和田高等学校非常勤講師）

見出し語のランク見直しについて 編集部

『ジーニアス英和辞典』は見出し語のランクについても改訂のたびに小規模の見直しを行ってきたが、英語自体の変化や教育環境の変化についていけない部分があった。第4版では、コーパスを駆使して実際の使用頻度を確認し、現代の日本人英語学習者にとって重要な単語は何かという観点から抜本的にランクの見直

しを行うことにした。

見直しにあたっては、担当の先生に次のような作業による原案を作っていただいた。

1. 第1段階（基本ランクの決定）

(1) A, B, Cランクの決定：市販されている様々な英英辞典の定義語彙、British National Corpusの頻度表（6300語）、独自に構築したコーパスをもとにして作成した頻度表（62500語）等を比較検討しながら、A～Cランクの候補語彙を決定する。

(2) Cランクの再チェック：(1)で得たCランク候補語彙について、ビジネス関連語彙が十分入っているかを調べるため、大修館のTOEICシリーズ3冊に出てくる語彙の頻度表を作成し、それに入らないものを抽出して、そのランクを再検討する。特に頻度数の低いものはDランクに落とす。

(3) Dランクの決定：G3のDランク語彙（約69400語）のうち、BNC Sampler 頻度表（46000語）にないものを抽出し、そのランクを再検討。

2. 第2段階（補正作業）

第1段階終了の時点で、G3の見出しの中でランク変更が行われた語は全部で864あった。今度はこの864語を対象に次のような補正作業を行っていただいた。

(1) 中学学習語彙の復活：現在中学校で使われている教科書（7種類）に現れる語彙3470語の中にありながら、第1段階で降格になっているものはG3のランクに戻す。

(2) 高校生用基本語彙の見直し：日本で公開されている語彙リストの頻度順上位4500語のうち、第1段階でCランクになっているものをBに上げる。

(3) 生活語彙の見直し：アメリカで出版されている生活語彙辞典にありながら、G4ランクでCランクになっているものをBに上げる。

(4) ジャーナリスティックな語彙のチェック：コーパスを使用するとどうしてもジャーナリスティックな語彙が多くなるので、第1段階で不当にランク上げされていると思われる語彙を拾い出し、適宜格下げを行う。

以上の作業で原案が完成。それを校閲段階でさらに複数の先生に微調整していただき、新しいランクが決定した。

受信から発信への橋渡し

——『プラクティカル ジーニアス』を軸とした語彙指導

杼原 均



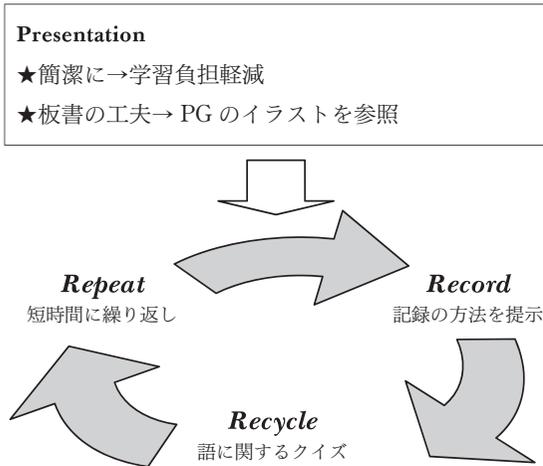
近年電子辞書の普及とともに辞書指導のワークショップも多く見受けられるようになり、辞書指導の重要性は再認識されてきていると思います。本稿では、『プラクティカル ジーニアス』（以下PG）を軸とした日頃の授業実践の一部を紹介させていただきます。

1. 発信を意識した語彙指導の流れ

学習者が未知語に出会ってからその語を発信できるまでにはいくつかの段階がある。まずその語を覚えるための input が必要であるし、どのような語と共に使う語か、どのような場面で使うべき語かなど様々な語法や背景知識が不可欠である。

そのため私は、図1のように、語の導入(Presentation)の後、3R's (Repeat → Record → Recycle) のサイクルで授業を展開している。

図1 『プラクティカル ジーニアス』を軸とした語彙指導の流れ



1.1 Presentation

First impressions are the most lasting. と言う。語の第一印象は大切にしたいと考えている。動作や物で

示すことができるようなものはできるだけその場で示すようにし、またPGには語の概念を示すイラストが随所に掲載されているので「これはいい」と思ったら板書している。例えば、PGのbranchの項に添えられているイラストを板書することによって、branchの原義【「枝」から「枝状のもの(支流・支局)」をさす】という語の概念が分かりやすく頭に入ってくる。

新出語句導入においては、その語をどのレベルまで教えるかということを意識しておくことが大切であろう。英語IやIIの教科書であればページごとにいくつかの新出語(句)が本文にあるが、私はそれらを同じように扱うのではなく「見て意味さえ分かればよい(receptive)」単語なのか「単語が正しく使える(productive)」レベルまでのものかを大まかに区別している。その1つのめやすとして、PGのAランク(約1100語)からDランク(約31000語)までのランク表示が大いに参考になる。そして毎回の授業においてWords for todayを選定しておき、記憶に留めやすいようにその語に関するトリビアを紹介したりする。時間の制約もあるので平均3～5語といったところである。

新出語句と共に派生語、類語、反意語等々を一度に提示すると、学習者が覚えられないだけでなく、混乱を招く結果になりかねない。まずは覚える核をつくるのが大切である。

1.2 Repeat

反復練習は語学学習には欠かせない。口頭で行うことが多いが、「英語から日本語」から「日本語から英語」「英英辞典の定義」とバリエーションを加えて、できるだけ短時間で済ませるようにしている。

1.3 Record

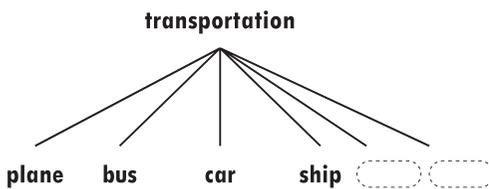
英単語とその訳語だけを書き写している生徒が多く

見受けられるが、マッピング、図表、グルーピング、スケールなど視覚的に記録する工夫の例を提示している。

例えばPGのtransportationの項で《飛行機・船・列車・車など》とある。ここで図2を板書する。図によって上位語と下位語の概念がより理解できるだろうし、関連語のまとめにもなる。

ポイントは、指導者が全部を書くのではなく学習者が後で書き足しができるようにわざとブランクを空けておくことである。また定期的にノートを提出させ、よく調べてあるものや工夫してあるものに対しては評価にボーナスポイントをプラスしている。

図2



1.4 Recycle

形を変えて語を再提示することによって、類語との区別、関連語への広がりが可能となり、その語を発信するための足がかりとなる。クイズは短時間でできる効果的な辞書活動の好例ではないだろうか。

〈関連語を問う問題〉

Q: Put these parts of the leg in order from highest to lowest. (thigh, knee, heel, calf, foot, ankle)

[PGではbodyの項にイラストがあり、これを見れば一目瞭然]

〈日本語と英語の意味範囲の違いを問う問題〉

黒板に「頭から肩」の絵を書いて、

Q: Where is the shoulder?

生徒を指名してその部分に色をつけさせる。その他、odd one outによる類語の区別など、まだまだ工夫の余地は多いアクティビティである。

2. The more, the merrier

PGの特筆すべき点の1つとして、語に関するjokeが掲載されていることがある。これはuserが「用がなくても自然に辞書を手にする工夫」の1つではないかと敬服した。jokeには、英語圏の歴史や文化的背

景知識、英語の韻やダブルミーニングを知らなければ理解できないものなどがあり奥が深い。みんなが笑っているjokeのオチが分からないことほどつまらないことはない。

紹介の手順としては、こちらで英文を読んだり、あるいは板書してクラス全員に何がおもしろいかを考えさせた後、オチが分かった生徒に説明をさせている。オチが分かった生徒の顔は輝き、まだ分からない生徒は必死に考える姿が毎回見られる。特にブラックジョークは生徒にも好評だ。中にはPGのjokeを拾い読みしている生徒もいるので、洋書の“Jokes for kids”なるものを折を見て紹介している。ただその選定は案外難しく、その点PGのjokeは日本の英語学習者に分かりやすいものを厳選して取められているようなので、その選定基準はネタ集めの参考となっている。さらに、少し分かりにくそうなjokeには◆の印がついていて、どこがおもしろいかが説明がされているのもよい。

3. 圧縮から解凍へ

辞書の紙面は限られている。ユーザーにとって多くの情報をいかに無駄なく掲載できるかに辞書編纂者たちはしのぎを削っていることであろう。それゆえわずかなスペースに中身の濃い情報が凝縮されていることがよくある。しかし圧縮されているゆえに、学習者の中には、一度では理解できないところもあるように思える。そこで指導者の役割は、辞書に記載されている、時に圧縮された情報を解凍して学習者に示し、彼らの理解を容易にすることである。

*

「辞書指導」とは、つまるところ情報検索技術を養わせ、必要な情報を探して、それをいかに生かしていくかを教えることではないだろうか。それは、これからの社会ではなくてはならないものであり、また卒業後もすぐに実社会で非常に役立つ技術である。

英語の教師として、進化し続けるPGと共に「辞書指導」と肩ひじはらず「さりげなく」「気長に」をモットーに、学習者と「知識の泉」を探索していきたいと常に考えている。

(とちはら ひとし・三重県立飯野高等学校教諭)

机の上のことばの海

—『ベーシック ジーニアス』を使って



武川伸一

■はじめに

本校の英語の授業は、1年生で3単位、2年生で2単位、3年生で2単位で、合計7単位です。それに選択の授業が2年生で2単位、3年生で2単位の合計4単位となっているので、3年間の英語の授業は最大で11単位になります。しかし、圧倒的大多数は7単位を履修して卒業するのが現状です。

3年間で7単位の授業で何をしていくのかを考えた時、教科書を中心としながらも、もし卒業後に英語を学ぶ必要に迫られた時に、ほとんどすべての答えは辞書の中に求めることができることを知っておいてほしいと考えました。そのことを実感として覚えてほしいと思い、授業中に辞書を引く時間をできるだけ取るようにしています。

この場で報告するに値するような実践は何も持ち合わせませんが、拙稿を読まれたみなさんに安心してもらえる(?)のではないかと思います、稿を起こすことにしました。

■『ベーシック ジーニアス』を選んだ理由

本校で『ベーシック ジーニアス』を使って3年目になります。現在は全学年が同じ辞書を使っています。

『ベーシック ジーニアス』を推薦するのは、そのバックボーンに、定評のある『ジーニアス英和辞典』があるからです。

私自身、とても愛用していて、G2は何度も引いたので、カバーから本体がとれてしまったほどです(決して不良品でも、私が乱雑に扱ったわけ

でもありません)。ほとんど全てのページに色鉛筆で線が入っています。それほど愛着のある辞書を底本としている『ベーシック ジーニアス』ですから、大いに信頼しています。

■授業の実際

「はい、教科書と辞書を忘れた人〜！」

まずこの一声から授業が始まります。何も言わなくても、全員が教科書と辞書を持って来ている、ということではなくて、仕事をさせてくれます。毎時間調べていると、全員が教科書と辞書を持って来ているクラスがだんだん出てきます。全員は持って来ていなくても、忘れる生徒は多くても3〜4名ほどに収まります。

それから、授業プリントを配布します。プリントには、教科書の本文を載せ、単語や熟語とその意味を書き込めるスペース、それから、英文の意味を書くスペースがあります。(これは議論のあるところだと思いますが、基礎・基本の力をつけていくには簡単に時代遅れだと言いきれないと思っています。)

単語や熟語については、新出の単語や熟語だけではなく、必要だと思われる語はスペースのある限り載せるようにしています。例えば、不規則動詞の活用は、その単語が出るたびに書かせることにしています。プリント1枚に載せる単語・熟語の数は20〜30です。それを板書している間に、生徒は辞書で調べます。理想を言えば、板書の時間内で、すべての単語・熟語が調べられていればいいのですが、現実には、生徒は自分が当たる順番を

知っていて、その単語・熟語だけの意味や活用形を調べます。でも、欠席者がいたりして順番が違っているのに気がつかないで、自分の順番を迎えることが間々あります。このときがチャンスです。生徒と一緒に辞書を引きはじめると、当然のことながら「常勝」です。すると、次のようなやり取りが展開されます。(実際は広島弁ですが標準語に翻訳します。)

「なぜ、そんなに辞書を引くのがはやいのですか。ページを覚えているのですか。」

「まさか、そんなことはないよ。それは今までに辞書を引いている回数が違うからね。」

こういった時に、英語の学習をしていく上での辞書の効用を少し話したりします。

そうして意味を答えてもらうのですが、その時も珍答が出たりします。その多くの場合が、その単語の原義を答える場合です。現在の意味に近いものもあれば、元はそういう意味だったのかと思うようなものもあります。そういった時もチャンスです。辞書の構成について説明できるからです。

また、品詞の区別がつかない場合なども、合っているようでもう一步違う答えが出てきます。そういう時も、品詞の区分を知るためのいい機会になります。

ただ、いつもそんなに時間をかけているわけにもいかないので、あらかじめ品詞を指定する場合もあります。

また、熟語や成句などの意味を調べるのも一苦労です。何をどのように調べるとその熟語や成句に行き当たるのかが全く見当がつかない時があります。そういう時もまた辞書の引き方を説明するいい機会だと思っています。

■辞書で「調べる」と、辞書を「読む」と

辞書は、言葉の意味を調べるためにあるのですが、授業の中でできるだけ辞書を読む時間を取るようになっています。

例えば、月並みですが、動詞 take など語義がたくさんあるものなどは、教科書に出てくる意味だけでなく、一斉に辞書を開いて読むようにしています。そうすることで、言葉の多義性を感じてもらえたらと思っています。

また、囲みになっている語法の部分も必要に応じて読むようにしています。先日も、よく下調べもせず、授業プリントに Here is (are)～. を載せて意味を書き込ませるようにしていました。そうすると、生徒はその形の意味が見つからずに苦労していました。そんなわけないだろうと思って、辞書を見てみると本当はないッ！と内心少し焦りましたが、囲み記事の中に発見することができました。これはいい機会だと思い、それを答える生徒だけでなく、他の生徒にもその囲みの部分を読んでもらいました。

このような形で、「辞書指導」と大上段に構えるのではなく(大体、こちらがまなじりを決めて力み返っても、成果はそんなにない)、授業の中で辞書を使う機会をできるだけ多く作るようにしています。そうする中で、辞書に親しみを覚え、英語を学習していくのに辞書は欠くことのできないものであることを実感してもらえたらと思っています。

■紙の辞書と電子辞書と

現在、率直に言って、私個人は電子辞書派です。魅力は、検索の速さと携帯性です。

ただ、高校生には、まだまだ紙の辞書を使ってもらいたいと思います。「紙」の長所は一覧性だと思います。見開き2ページの量は電子辞書のディスプレイには出ません。

自分が調べたいことばだけではなく、辞書ということばの海で道草するのには、紙の辞書の方がうってつけだと思います。

(たけがわ しんいち・広島県立宮島工業高等学校教諭)

英語力とは何か

山田 雄一郎 著

大谷泰照

(大阪大学名誉教授)



ここでいう「英語力」とは、英語の国際的な力などとは区別して、学習者がもつ英語の力の謂である。

英語教育は、いうまでもなく「英語力」の向上を目指す。ところがわが国の英語教育は、まことに不思議なことに、この肝心の「英語力」の問題について、正面切って論じることは、これまでほとんどなかったといつてよい。つまり、「英語力」の正体も定かでないままに、ただひたすら「英語力」の向上が叫ばれてきた。

本書は、こんな「英語力」の曖昧さを糺し、それに一定の理論的枠組みをあたえることによって、日本人の英語教育の新しい方向を指し示そうとする。

「英語力」は、従来、英語の単独の能力と考えられがちであったが、著者はその考え方をとらない。バイリンガルの言語能力を説明するためには、われわれの母語である日本語を通して形成された言語能力が、第二言語としての英語の発達と無関係ではないと考えざるを得ないからである。それは、いわゆる母語干渉をみれば納得がいく。

著者は、「英語力」とは、英語の4技能（英語形式の運用能力）に加えて、その背後にあり、母語を通して形成され、英語にも転化し得る言語能力（共通基底能力）、そしてそれらの中間に位置する言語の変換装置（変換能力）の3能力の3層構造と考える。

こうみると、従来のこの国の英語教育の関心が、いかに英語形式の運用能力に偏り、他の2つの重要な能力が顧みられていなかったがよくわかる。プロの教師たるもの、自分の教えるものの正体は当然知っているべきところ、「英語力」については、それができていないというのである。この指摘、文字通り、頂門の一針というべきではないか。

英語感覚が身につく 実践的指導

——コアとチャンクの活用法

田中茂範／佐藤芳明／
阿部 一 著

山賀淑雄

(新潟県教育庁高等学校教育課
企画振興係指導主事)



本書は認知的スタンスに基づき、「コア図式」と「チャンキング」という概念を用いながら、英語の語彙と文法を扱い、今後の英語教育の指導法に大きな指針を与えている。語彙については、第1、2章でコアの概念を用いて、基本動詞と前置詞の意味を分析している。辞書では通例、1つの語について複数の語義が列記されているが、コア理論ではそのすべてを統一的に説明する記述や図式が用いられる。この理論を使えば、例えばtakeなどの多義語を教える際に、本書で提唱されているようなLC-カードを提示することにより、語の全体像を把握させることができる。また前置詞の多義性も、日本人には習得の難しい分野の1つであるが、これもコア図式が有効に働く。初期の学習者であっても、onやatなどの前置詞の全体像は比較的容易に理解できるだろう。

第3章では語彙の意味(コア)から文法現象を説明する新しい教育英文法を提案している。例えばhaveは最も基本的な語の1つであるが、意味の多義性に加え、使役や受益、さらに現在完了にも用いられ、学習が進むにつれて困難さが増す。これらを筆者はHAVE空間という図式を用いて統一的に説明している。学習者はこの説明で動詞haveの本質が理解できるはずである。第4、5章ではチャンキング理論に基づいて、会話の文法性を取り上げ、英語を実践的に学ぶ方策を提案している。チャンキングの概念そのものについて初めて触れる読者も、読み進むにつれて、教育現場におけるその有用性の大きさを理解できるだろう。本書では他にも様々な学習上のアイディアが盛り込まれている。英語という言葉の本質を理解し、また英語教育に新たな展望を開く上でも大変有益な1冊である。

第二言語習得研究から見た 効果的な英語学習法・指導法

村野井 仁 著

岡崎浩幸

(富山大学助教授)



本書は「教室第二言語習得研究」の第一人者がその研究成果を基に、指導法・学習法のあり方を見直し、具体的な提案をすることを目的に書かれている。

医師にとって、生命維持のメカニズムについての基礎知識は不可欠である。同様に、生徒の英語学習の責任を負う英語教師にとって、教室第二言語習得のメカニズムに関する知識は大切な意味を持つであろう。

「どのようなインプットやインタラクションをどのように取り入れれば効果的なのだろうか?」「どのようなアウトプット活動が効果的なのだろうか?」といった中高の先生方の素朴な疑問に対して、すべて明快に答えている待望の書である。第二言語習得の促進に役立つインプット、インタラクション、アウトプット、フォーカス・オン・フォームを用いた文法指導、動機づけなど、日ごろの授業の組み立てや軌道修正を行う際に欠かせない要素が丁寧に解説されている。

本書全体を通して、第二言語指導の中心を言語形式におくのではなく、題材内容について理解を促し、考えを深め、内容について英語で表現することを重視する立場(内容中心指導法)を著者が貫いていることが、本書を薦めたい理由のひとつである。読む題材を中心にした検定教科書を用いた授業が多く行われている日本の現状と合致した主張である。

著者が最後に、第二言語を身につけ、ことば、文化、価値観の異なる人と対話をする力を育てることは、共生を求める人類にとってきわめて重要であり、重要な仕事であるからこそ暗中模索ではなくしっかりと進む方向を明らかにしていかなければならない、と述べている。中高の英語の先生方には常に手元に置いて大いに活用していただきたい一冊である。

英語教師のための 「学習ストラテジー」ハンドブック

大学英語教育学会

学習ストラテジー研究会 編著

前田啓朗

(広島大学外国語教育研究センター助教授)



「学問に王道なし」というのは、何にでも当てはまる。英語学習においても、自分の好みや向き不向きという状況をふまえ、学習する目的や内容という場面しだいで、道はそれぞれ異なって当然とも言える。

また、授業だけで英語がとてもよくできるようになるというのは、残念ながら現実的ではない。授業外で自分で勉強することが、基本的に不可欠である。

本書の第1章は「先生、どうやったら英語ができるようになりますか?」という生徒の質問から始まる。適切な学習へと生徒を導くには、どうしたらよいのか。

それにはきつと、学習量だけを見てたくさん頑張らなさいと励ますだけではなく、また学習内容だけを見て問題集を指示するだけでもなく、自分の学習方法を認識し、適切な学習が自分でできるように指導することが欠かせない。この類の質問には「学習ストラテジー(学習方略)」という概念を指導に応用して答えるのが有効である。第1部では理論的な解説とともに、様々な方略が提示されている。

理論と説明だけではなく、さらに第2部では、中学校で17種、高等学校で20種の指導案が示されている。主要な学習方略の指導プランが「準備→提示→練習→評価→応用」という5つのステップを踏んで紹介されており、本書の大きな特長となっている。

指導にも学習にも「1本きりの王道」はない。しかし、教師のレパートリーを増やすことで、適切な指導を行いやすくなる。ひいては生徒の学習のしかたを増やすのにつながり、状況や場面に応じた「そのときの王道」を自分で適切に選べるようになるであろう。その助けとして、理論的な説明と実際の指導場面とを連携させつつ、本書は有効な知見を与えてくれる。

大修館書店の本

Books from Taishukan

◆指導と評価を一体化させる生き生きとした授業の実践例

英語教育21世紀叢書

中学校英語授業 指導と評価の実際

杉本義美=著

(四六判・viii+142ページ・本体価格1,260円)

◆様々な言語音の発音と聞きとりの勘所を明解に解説

実践音声学入門

J.C.キャットフォード=著, 竹林滋・設楽優子・内田洋子=訳

(A 5判・xiv+293ページ・本体価格2,500円)

◆基本の考え方を豊富な英語例文や図解で学ぶテキスト

実例で学ぶ認知言語学

デイヴィッド・リー=著, 宮浦国江訳

(A 5判・xii+306ページ・本体価格2,600円)

◆「効果的な語彙定着」の要望に様々な観点からこたえる

英語語彙指導ハンドブック

門田修平・池村大一郎=編著

(A 5判・320ページ・本体予価2,500円)

(定価=本体価格+税5%)

訃報

9月10日に、小西友七先生が享年89でご逝去されました。『ジーニアス英和辞典』発行から20年目、「G 史上最大の改訂」を合い言葉に作業が進められていた『ジーニアス英和辞典 第4版』の刊行を目前にしての訃報でした。小西先生は aggressive な改訂をするよう編集委員の先生方を督促し、また自ら G4 の校正刷りに目を通して、改訂に備えて書きためた追加事項を記入するなど、改訂作業の先頭に立ちつてられました。小西先生には、『ジーニアス』シリーズの編集主幹はもちろんのこと、1965年4月号から42年間に亘り、小社刊の雑誌『英語教育』の Question Box の回答もご担当いただきました。素朴な質問から語法の微妙なニュアンスを問う質問に至るまで、毎回とても丁寧に回答下さいました。心からご冥福をお祈り致します。

◆営業便り◆

▶文化祭などが終わり、やっと読書の秋という季節に入りました。先生方におかれましてはお忙しい日々をお過ごしのことと存じます。平成19年度教科書の注文が全国から多数到着しました。ご採択いただいた先生方にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。各教科書には準拠 CD-ROM、ワークブックなどを発行しております。お問い合わせは小社販売部もしくは最寄りの小社営業所までご連絡下さい。

▶今年の秋に、5年ぶりに『ジーニアス英和辞典 第4版』を刊行する予定です。今回の改訂は発刊20年目を迎えた学習辞典のトップランナー『ジーニアス』として史上最大の改訂です。語義区分・用例・発音を最新の使用実態に即して大幅に見直したほか、コラムや図表をふんだんに盛り込み、見やすさもアップしました。ぜひ新入生の皆さんにお勧めくださいますようお願いいたします。

▶現代の子供は紙の辞書より電子辞書をうまく使いこなしているようです。メディアとしても電子辞書のほか、ネットや携帯のサイト、ゲームのソフトまでさまざまです。おかげさまでほとんどの電子辞書やいくつかのサイトで、当社の『ジーニアス英和辞典』(第3版)、『ジーニアス和英辞典』(第2版)などが活躍しています。辞書を作る会社側としては最高の荣誉であります。今後もさらにより良い辞書づくりに励んでまいりたく存じます。



ご投稿大募集中



『G.C.D.英語通信』は、先生方と小社英語編集部との意見・情報交換の広場です。小社教科書についてのご質問、お使いいただいた感想などを小誌編集部宛にお寄せください。「GCD 教科書 Question Box」で随時ご回答・ご紹介してまいります。

また、英語や授業に関わるさまざまな投稿、特に下記のテーマに関するものなどをお待ちしております。

- ・授業レポート…特色ある授業の実践記録
- ・授業実践シリーズ…小社教科書を使った授業の紹介
- ・英語教師のひろば…英語教育全般

ご投稿は、郵便でお送りください。採用分につきましては、発行後、薄謝をお送りいたします。なお、採用・不採用にかかわらず、原稿はお返しいたしません。また、採否のお問い合わせには応じかねます。あらかじめご了承ください。

Genius・Captain・Departure

英語通信

第40号

2006年11月1日発行

(年2回発行)

【出版情報】<http://www.taishukan.co.jp>

編集人 ©「G.C.D. 英語通信」編集部

発行人 鈴木一行

発行所 株式会社 大修館書店

101-8466 東京都千代田区神田錦町3-24

Tel. (03)3294-2355(編集部) / (03)3295-6231(販売部)

振替 00190-7-40504 印刷・製本 文唱堂印刷株式会社